

## 編集室から

兼六園の夜桜という難しい被写体に魅せられ毎年撮影に没頭してきたここ数年。ところが今年は、タイミング全く合いませんでした。

例年よりも早めの開花に、年度末仕事の延長戦処理で街に繰り出せず、やっと時間ができたと思ったら雨、雨、雨。年間に1mm以上の雨が降る日数が176日、つまり二日に一度雨が降る街・金沢。しかし桜の時期だけは天候が良い日々が続いていたのですが…。こんな年もあるんですね。

毎号表紙写真は、一年前の同月の写真を採用しているので、来年の4月号は悩みそうです。

さて、今月の表紙写真は、今年のGW中に地元七尾市で特別に展示されていた街並みの建築設計模型のワンシーンです。

この模型は、建築系学生の卒業設計を一堂に集めて競う建築の甲子園「せんだいデザインリーグ2014」で見事、日本一の栄冠に輝いた作品です。

製作者は、地元七尾高校から九州大学へ進学された岡田翔太郎氏。

薫風爽やかな臯月2～5日に七尾旧市街で繰り広げられる無形文化財の青柏祭・デカ山をモチーフに、それらと街とが渾然一体となってハレ（祭礼）とケ（日常）が溶け合う街を表現されたのだらうと思います。

幼少のころ、都市計画家を目指していた僕にとって刺激的な作品で、夢中でシャッターを切っていました。

北陸・能登の天候も安定し、山笑う季節。こんなにも色々な緑色が在ったのか！と感嘆する山の新緑に囲まれて、我が家の田植えが始まります。秋の収穫まで一連の労働に、その都度直接収入は入りません。収穫後、それまでの対価として一年間主食の心配なく暮らせます。

農業も権利的収入源の一つなのです。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2015/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2015/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 臯月



建築の甲子園・卒業設計  
せんだいデザインリーグ2014  
にて日本一となった  
七尾・青柏祭デカ山のまち

Photo by hama

# 寄稿 『言葉に対する一考察』

AMENO UZUME代表 石川 浩代

最近、言葉に対して「プラス言葉」「マイナス言葉」と捉えて使う傾向があります。「その言葉自体に、更にプラス・マイナスの意味を持たせている」ということと私は認識しています。

この場合、プラスやマイナスの意味を持たせているのは『自分自身』なんです。言葉というのは本来、プラスもマイナスもありません。捉えた本人がプラスかマイナスの意味を持たせているのです。ところがご本人が、何時いかなる時もずっと同じ意味を持たせていて貫き通せるかというところ、違えます(笑)

意識的にしろ、無意識にしろ、その言葉を使う、または聞いた本人は、「時」と「場所」と「相手」に対して、その場にふさわしかったかどうか？を判断して変化させているのです。

日常の場面でこういうことはよく見かけます。

例えば「バカ」という言葉ですと、「バカだなあ」すくく気にかけているのがわからないのか？

その一：受け手側が「バカとは何よ！バカとは！！」そんなマイナスの言葉で私を責めるなんて、気にかけているだなんて言われても嘘に決まっているわ！！」という反応。

その二：受け手側が「私ってバカよね。私のこと気にかけているという気持ちこそ素直に受け取れなくてごめんなさい。」という反応。

これらの反応はほんの一例ですが、これが、好きでたまらない彼や彼女だったらどうでしょう？尊敬している上司だったら？または嫌いな上司だったら？ストーカー

## 濱のつばやき 『暮らしの中の文化』

「縁とは不思議なものだ。人と人との縁もさることながら、モノとの縁もある。風流や情緒に詳しい方から一冊の図書をご紹介いただいた。早速読み始めたのが「雪月花の数学」。雪月花とは日本人の自然観を最も象徴する言葉である。

著者は、数学エンターテイメントという世界初の領域を開拓しているサイエンス・ナビゲータの桜井進氏。赤い帯には「北斎、雪舟、法隆寺、平安京、茶室、生け花、俳句・数式は全てを知っている。日本文化における『数』の不思議を解き明かす！」とある。

洋の東西を問わず、暮らしの中に潜むさまざまな事象について数学を駆使しつつも、平易に解き明かしていく辺りは、氏の真骨頂であろう。中でも圧巻は、数々の事例を元に、西洋の美意識の根底には黄金比が、日本には白銀比があるという点だ。

黄金比は比較的知られているが、およそ5対8であり、西洋建築や彫像はみなこの比率を内包している。鉄道やバスなどのICカードの縦横比も黄金比である。一方、白銀比は初めて聞いた。正方形の一边の長さと同角線の長さの比。すなわち、1対ルート2である。和室の畳は二畳で正方形となるように、伝統的な日本建築は、全て正方をベースに立てられ、生け花や浮世絵のバランスも白銀比になっているという。

だったら？あこがれの人だったら？みんなの前で言われたら？こっそりと二人きりのときに言われたら？涙流して言われたら？

程度の差はあれ、微妙に変化しているのではないでしょうか？過去を振り返ってみて、似たようなシーンを思い出して、どんな心境だったかを思い出してみると、わかりやすいかなと思います。

言葉を使う時の「自己を客観視する認識」として、

◎言葉に対する意味づけは、言う場合も聞く場合も、その本人が決めている。

◎同じ言葉も、「時」と「場」と「相手」によって、自分自身が変化させている。

この認識を持つことによって、より一層言葉と仲良くできる自分を垣間見れるきっかけになると思います。そこから、必要なこだわり・不必要なこだわりや、言葉の奥に隠れている真意や、思い遣り、これらのことに気付いていけるのではないのでしょうか？

人は言葉に対して、「表面的な意味」ではなく、その奥に隠されている「真意」を汲み取りたい、そして分かち合いたいと常に心のどこかで思っています。これこそが、人間が人間たる所以の、言葉を通じた深い交流の真意ではないかと思うのです。

言葉に対する認識を通して、「自分自身はどう在るか？」とGWの間にご自身に問いかけてみるのも、味わい深い時間となるかも知れませんね。



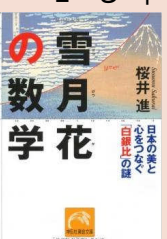
【プロフィール】(いしかわひろよ)日本人力プロデューサー。人間観察力を養うため看護師を始め、飲食店経営など多面的な職業経験を経て現職。マインドブロックバスター養成講座も開講し、卒業生を多数輩出。言祝ぎ塾主宰。

実例の数々は原書に当たっていただき、直接感動して頂くこととしたいが、同書の後半、多くの紙数を割いて触れられていたのが、和算であった。

日本国家と数学との関係は長く、奈良時代の官僚養成の場・大学寮ですでに連立方程式の解法が講義されていたらしい。また平安時代には九九が貴族に流行し、万葉集の読み下しに九九の漢数字を当てた例があるという。下って江戸、塵劫記という算術書が爆発的に売れたらしい。浮世絵に見られる印刷技術、寺子屋などによる識字率の向上、民衆の暮らしに余裕が生まれた天下泰平の世が背景にあったのかもしれないが、それにしても数学書が民衆の間に広まったこと自体、この国の民の底力を見る。

江戸初期、既に天才数学者と称され、筆算を発明した関孝和が上州に登場し、和算の質と裾野は一気に拡充していく。後の維新を経て、大国との戦では砲弾が用いられるが、この砲弾が重力で放物線を描く事象を解かねば、命中率は上がらない。維新後間も無い「小国」日本が大国と互角に戦えたのも、和算の伝統が支えたのかもしれない。

江戸時代、自分が解いた問題を額にして神社に奉納することが流行した。地球規模でも高等な数学が、庶民にまで浸透していた国・日本。暮らしの中に数学が息づき、数学が芸道と止揚し融合していた文化性。「この国の価値」をしみじみと想うのである。



デフレを象徴する飲食、小売業において明暗がわかれている。

(明) Nトリ - Yニコロ - Y野家 - Mクドナルド (暗)

「企業努力故の低価格 or 低価格前提でのガバナンス」で差がついたのだと思う。

それにしてもNトリの業績は驚異的である。消費税率引き上げや円安という超弩級のマイナス影響を乗り越え、28期連続増収増益を達成している。

アベノミクス発動以来、消費行動に変化が生じている。高級品の売れ行きがいいのはわかる。資産効果<sup>1</sup>だ。しかし、アベノミクスで値上がりするような資産を持っていない人にも変化は生じている。給料はたいして上がっていないのだが、なんとなくうかれた雰囲気が蔓延しているのだろうか。変化は量的なものではなく、質的な変化がひたひたと迫ってきているように思う。

一方で、消費税率引き上げに伴う、駆け込み需要とその反動減が生じ、そして引き上げ後1年が経過し、外国人観光客の増加等もあり消費はやや持ち直しつつあるようだ。

統計データをじっと見ると、引き上げによる消費への影響度合いはけっこうまちまちである。ある統計データを拾うと、

「消費税率引き上げの影響は反動減の範囲内であり軽微だ」となり、別のデータを拾うと

「減少の度合いは深刻で長期化しており、日本経済へのダメージは大きい」となる。ポジショントーク<sup>2</sup>に気をつけないといけない。

ただ、アベノミクスから消費税率引き上げの一連の流れから、消費に明らかな質的变化が生じているように感じる。それを象徴するのが、冒頭に述べた明暗。

景気の気は気分<sup>3</sup>の気と言う。ペントアップ・デマンドという経済用語がある。景気低迷下で抑制されてきた需要のことを指す。これが、このアベノミクスのうかれ気分によって刺激を受け、また、消費税率引き上げによる一種のあきらめ気分により、顕在化した可能性がある。うかれ気分とあきらめ気分が背後にあるいま、消費は単なる安いものに向かっているように感じる。

ふられ気分とならないように、「お、ねだん以上。」<sup>3</sup>のものを示し続けることが求められている。

注1：資産価格が上昇することで消費・投資などが活性化することを指す。たとえば、土地価格の上昇や株価の上昇などによって消費や投資が促進されることを指す。

注2：株式市場等において、自分の買いや売りのポジションに有利な方向へと誘導しようとして、著名な市場関係者がマスメディア等を通じて発言を行うこと

注3：Nトリのキャッチコピー。

今回は勝手に私の身の回りで起こった出来事かつ、愚痴を書かせていただければと存じます。先月に恵比寿の調理サポートスタッフが肝臓癌になってしまい(本日27日が手術日です。負けないでほしい!!)また渋谷のフロアスタッフがスケボーで大けがと立て続けに貴重な人材が一時リタイアすることになってしまいました。そこで体制の強化も含めて飲食店専門の求人サイトに募集を掛けたのが先々週。そこから現在まで起こった事件をお伝えすると

36歳 男性 調理希望

少し引込み思案な感じはしましたが、誠実そうな人柄から恵比寿の調理スタッフとして採用。

翌日からの勤務となりました。まずはランチからの仕事がスタート。蕎麦屋は初めての経験なので、まずは全体の流れを教え当面は洗い場を担当してもらうことにしました。ランチが終わると、『少し出てきます』と言って外出。まあ、最初は打ちとけるの大変だよなと思いつつ『16時には戻ってきてね』と伝える私。しかし16時を過ぎても戻ってきません。電話をすると『蕎麦屋はやはり僕のやりたい事と違うので辞めます』という返答。

あれっ、蕎麦屋とわかってたから来たんだよね。

29歳 男性 調理希望

ほどなくして、渋谷の調理希望でやってきた小奇麗な風貌の爽やかイケメン。

九州出身で、ミュージシャンを志望して上京したが、夢破れ現在は将来自分の店を持つために調理の修行中とのこと。九州人らしい武骨ではあるが誠実な人柄が気に入り採用。半年後の成果によっては社員採用また将来は店舗をひとつ任せるという夢も与えてがっちり握手をして別れる。

しかし、明後日当日に店に顔を出さない。電話しても出てくれない。メッセージで『何か不安や悩んでいることがあれば是非話しましょう』と送るがレスはなし。

36歳 男性 調理希望

そのまた翌週に渋谷の調理希望で応募あり。

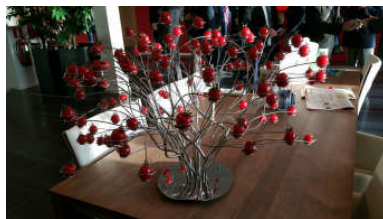
「二度ある事は三度ある」「三度目の正直」うーん、昔の人はどっちに転んでもいいような言葉をつくるもんだ。今回は面接前に、こちらの要望や期待を送りそれでもよければという条件で面談を行った。

土曜日の15時の約束が待てど暮らせど現れない。おっ、今回は会う事すらできないのか。

という非常に貴重な経験をさせていただきました。しかし、三名とも三十前後のいい大人であるにも関わらず、このような事でいいの？将来何を指す、成し遂げるにしても、自分の力だけではできませんよ。人に信頼され、それに真摯に取り組む結果を積み上げていくその繰り返しでしかありません。どんどん人との関係づくりに対して意識が希薄すぎやしませんか!!

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』オランダの施設園芸を視察  
静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

視察したトマトの温室は広さ6ha、軒高5m オランダでは作物に関わらず、この高さのものが一般的だ。夏の作業時には特に、その効果を発する。暑い空気は上がり、作業には好都合。温度の一定化にも具合がいいらしい。建設費は高いが、大量に建設されているから、コストは押さえられているだろう。上を見ると煌々と照明が点いていた。冬の時期の日の短さに曇天の空



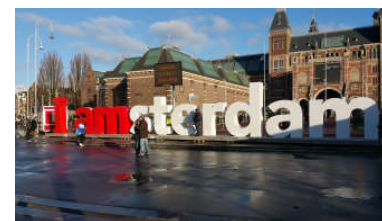
を見れば人工照明は生産性を上げる上で、欠かせない設備であろう。苗はブロックのロックウール培地に植え付けられ、肥料、水は点滴により供給されている。土耕栽培では肥料分が40%しか吸えないが、ロックウール培地では100%。灌水に必要な量もトマト1kgに対し300リットル、水耕栽培では4リットルに過ぎない。収穫は土耕で20kg/m<sup>2</sup>、水耕栽培温室で65、更に人工照明により85まで上がるそうだ。

70cmの苗を11月に植え、茎の長さは15mにも成長する。温室の高さをはるかに超えてしまうので、茎を上から吊り、収穫後の茎は水平に垂らしていく、こうして44段もトマトをならせる。

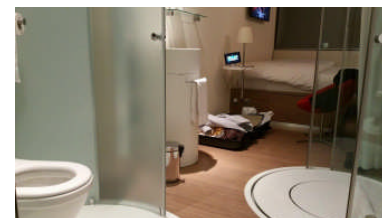


今回は、観光的なお話はせずに終わりとしよう。

でも最後の日の宿がとてもサプライズだったので、締めにはスキポール空港そばのホテルを紹介することにする。中廊下に3mに満たないピッチでドアが並ぶ。カプセルホテルじゃないだろうね、素泊まり17,000円なのに！



ドアを開けて驚いた。トイレとシャワーがガラスの円筒カプセルになり、扉が開いていることで、動線の確保と狭さを補う挑戦的プランだ。部屋の幅いっぱいダブルベッドが窓際に作り付けられている。ここに二人で泊まるには限られたペアだろう。部屋の灯りを点けようとしてもスイッチらしきものが見当たらない。枕元にタブレットが置かれていた。画面をよく見るとテレビ、照明、ブラインドのアイコンが並んでいる。こ、これで操作するのか！照明はビジネス、ムーディー、パーティーの種別がある。照明の色も変えられる。相当に驚いた。先端を走るデザイナーズビジネスホテルといったノリかな。



先端技術、目新しいことは日本やアメリカからと思っていると、知らない内にいろいろな国で新たな技術、デザインが生まれ目覚ましい勢いで先を突っ走っている。海外に多く出る機会を得ている小山町に来てからそのことを目に触れることが多くなった。



次はクロアチアへの旅が待っている。どんなサプライズがあるか大いに楽しみである。